最近のロシア思想界の動向について
―記号論的情報伝達に関する意識哲学の一断面―

尾崎　　誠

序言

かの冷戦時代が終焉し、マルクス・レーニン主義体制が崩壊した後の今日のロシアの哲学界では、いったいどのような変化が起きているのか、我が国ではほとんど知られていない状況にあるといっても過言ではなかろう。2007年６月に広島市で開催された国際ユニバーサル対話学会に研究発表の為に来日された、ロシア国立クラスノダール大学哲学科の主任教授であるヴァシリィ･グリツエンコ博士は、旧来のマルクス主義･史的唯物論に取って代わる最近のロシアのアカデミズムにおける哲学の新しい傾向を代表する見解を示している。ここにその邦訳を提示する。原文はロシア語で、それを同大学講師のタチヤーナ・ダニルチエンコ博士が英訳したものを中富清和氏と共訳したものである。中富氏は、主著『無と愛の哲学』（北樹出版）の公刊をはじめ、昨年はアジアで初めて開催された世界哲学会議（於ソウル国立大学）や国際宗教学宗教史会議（2005年３月、於東京）、国際ユニバーサル対話学会等でも研究発表を重ね、その一部はドイツ、ポーランド、ロシア、セルビアやギリシャ等の学術雑誌にも翻訳、掲載され、今夏もアテネ大学の国際学会に招聘されて講演を行っている。因みに、グリツエンコ教授は2007年６月、来日の折り、本学にも訪問している。かつて日本でもベストセラーになった『断絶の時代』で高名なアメリカの碩学ピーター・ドラッカー博士が予測したように、今日世界はコンピューターを媒介とした高度情報化社会に突入し、ロシアもその例外ではない。そのロシアにも地殻変動を起こしているコンピューター革命による思想の変化をここに垣間見ることができよう。

****

ロシアの情報伝達・意識の哲学について

ヴァシリィ・グリツエンコ*著
タチヤーナ・ダニルチエンコ**英訳
尾崎誠・中富清和***共訳

Ⅰ．意識―意味を探求して―

意識についての近代人間主義的理論は、しばしば、学際的分野で交差する、いくつかの平行ないし接続する諸知識領域に基づいて形成されている。

事実、意識の探求の客観的方法の進展や、それらに基づいた一般化は、進化論的認識論、記号論、意味論、仮想、共働作用論に見られる。精神性と意識の探求における客観的方法の使用によって生み出された根深い二元論が、この過去数十年間、世界観を不完全なものへと転じている。認識的情報接近、そして、いくつかの他の接近の観点からすると、生物学、人間生理学、さらには精神構造の間の断絶は本質的に克服不可能であるとは考えられてはいない。専門家達は次のことを認めている。即ち、新しい実験データ、そして相当程

度の妥当性をもって平行的かつ分散的な情報処理の原理に依存する神経ネットワークの新しいモデルは、脳機能の開示された神経生物学的メカニズムを再生産する。そして、これらのモデルの観点から、精神的プロセスは、分離された要素の特性としてではなく、神経ネットワークたる組織の特性として生じる、と。(16、741-745)

しかしながら、いかなる程度においても、“意識”の定義の困難さは、かの現象メカニズムの探求において一義的な理解の欠如した、意識に等価な脳研究にとっては障害となっている。そうした正確な理解の必然性は、同じ信号分析に依存する脳プロセスの比較の条件下では消失している。しかし、意識が参与するケースでは探求が進められているが、他の場合は明らかにそうではない。このような研究はCh.A.Izumaylov, E.D.Shehter、そしてM.M.Zimachevらにより、努力が傾注された。(６、34-50)

情報プロセスへの意識の態度の説明に関して、これらの科学者たちは、次のような仮説を提起している。つまり、人間の脳の働きは階層的組織を形成するプロセスの三つの型を含む。第一のレベルは動力のプロセスである。第二のレベルは脳の認識機能を提供する情報プロセスによって作られる。この段階ではさらに、物質的データの運び手の他に、理念的対象、感覚、維持、コードがある。第三のレベルは意識である。その際立った特徴は、理念的形態における動力と情報プロセスの両方が主体に提示され、またその理解と管理が容易であることである。この探求の結果は、次のように解釈される。即ち、意識は接触メカニズムの「中では形成されない」ということ、むしろ意識は視覚との関係においては事後的要素として作用する。意識は別の認識プロセス（知覚、知性、話）と類似している。さらに、このメカニズムは人工的に、たとえば視覚―電子的基盤上に描かれうるものである。このような解釈は、知らず知らずに、つぎのような結論に導かれる。即ち、意識は実体的な現象ではなく、仮想的特性をもつということである。そこにはある一つの仮定がある。即ち、意識の内面的特徴、即ち反映性と仮想としての特徴が同時に発生するのである。仮想のレベルと反省のレベルとが結合されているというのは、同じ現象の問いであることは、全く確実である。

＊＊＊

すでに古典的となった方法論的伝統によれば、意識分析の最も流布した方法のひとつは、構造的かつ構造機能的分析である。それは、人文学及び哲学にとって、例えば、弁証法的唯物論、心理分析、行動主義などの多様な方向へ向うという特徴をなしている。

弁証法的唯物論の知覚論において、意識の基本部分は、感覚的、理性的、意識的、そして無意識的でありうるイメージである。イメージ間の伝達は、情動―連合的あるいは論理的性質をもつ。意識の近代ロシア国内理論において、特に、教育文献において、この伝統は進行中であり、しばしばイメージはそれ自身において何物かとして理解されている。この伝統の優位さは、作者が彼自身を反復して把握する明確さ、透明さに見受けられる。

このような概念の成功例のひとつを手短に考察しよう。F.E.Vasiljukは四つの意識構造のイメージ・モデルを提供した。その最上位はイメージ、個人感覚、価値そして言葉の主体的維持により形成される（２、８）。イメージの感覚構造は、注意をどの側面に当てるかによって相違しうる。作者の理解における意識イメージは、三つの形や、いくつかの測定量を持たない。これらの四つ―価値、主体、個人感覚、記号―は文化の世界、外的世界の表象である。この階層的イメージにおいて、個人の私的世界と言語世界は、その極をなしている。第五番目の構成要素―感覚構造は、前述した四者とは平行的でもないし、固有なものでもない。こうして、F.E.Vasiljukによれば、個人的意識の構造は異なった世界間を連結

する交差の中心点である。価値は文化世界の基本的単位であり、語は言語世界の単位、感覚は個人の私的世界の単位であり、感覚構造は意識のイメージにおいて人間的身体の世界の代表として活動する（２、18）。このアプローチの制限内には、多くの別の注目すべき視点がある（３、４、189）。

同時に、かような方法論的アプローチには限界と境域がある。実際、構造的分析の基本的矛盾のひとつは次の事実に存する。即ち、一方では、洗練された種類において意識の要素を開示することが必要でありながら、他方では、これらの要素は純粋状態においては存在しないことが見出される。即ち、意識は特殊な統合性・高度の統一をもち、そして意識の精神的活動の原子的形成としての感覚は純粋状態では独立して存在しないのである。つまり、意識の維持が、機械的結合の代わりに、これらの要素の統合や綜合を表象するようには、意識の直接の経験は、感覚や感情の固有の言語によっては記述されえない。それゆえに、幾人かの近代の研究者はかなりの不満を唱えている。即ち、主体的実在の探求の三つの側面―構造的、機能的、実体的側面―は、決して統一的には考察されなかった、と（１、73）。

いかに方法論が構築中であるとしても、意識の実体的、構造的要素の側面は同時に考察しうる。さらに、Gegelの論理はそうした計画の変異のひとつのようにわれわれには思われる。しかしながら、それはさらに組織的には近代のロシア国内の科学において、主に心理学者、言語学者により展開されているところの意識の記号論的組織化の理論の中に現われている。（１、７）

1970年代に遡るソビエト時代の人文科学においては、感覚論への態度は懐疑的であり、感覚論はイデオロギー的恐怖＜主観性と観念論＞を目覚めさせた。この関連において、次の二つの文句が常に言われた。即ち、感覚は客観的実在の反映であり、“反映された”構造は反映している主体の反作用を含んでいる、と。感覚の局在化に関して唯物論的感覚の哲学的自然主義は、脳を最適な場所のひとつとみなしている。しかしながら、感覚は、判断や三段論法のタイプの論理的構造とは異なり、主観的（内的）生命を表示し、かつその条件を保持している。ソビエト的背景では、このような見解はD.I.Dubrovskyによって、感覚とは主観的な実在、理念として考察されたのである。

あらゆる意識の基本的領域は特殊的でありながら、また同時に普遍的（一般的）でもある。これらの一般性と相互関係との確立の問題は極端に複雑である。我々は次の仮説を防御しようと試みる。即ち、感覚とは意識の多様な領域の根源的「普遍的なもの」である。その特殊な性質は、意識の基本的部分は、分離された特性を所有しないことを示す。場としての感覚は、“流体”構造であり、感受性、明確さ、表現性をさまざまな程度に可能にする。意識と主体に対する世界のイメージにおいて、主体は知性像を知覚し、表象し、考えうる対象を開く。人間にとって世界は、その人間が判断主体となることによって意味となる。感覚は個人の独占的な特権であり、ひとつの事物として、あるいは、妥当性の客体の機能や特性としても見出されえない。世界の出来事、現象、文字テキストはそれ自体では意味を持たないが、現実に感覚的に知覚した主体が何物かについて知覚、表象、反省した時に意味を持つ。あたかも感覚は互いに流動し、結合され、充実され、濃縮される。それゆえ、感覚に対する態度は事物に対する態度のように論理的ではない。感覚は、部分的に展開するのではなく、全体として与えられているのである。

感覚及びこの機能における記憶の特殊な役割に基づいて意識の統合的特徴を確認できる神経生理学的諸事実がある（１、14）。感覚を除いて、この立場によれば、記憶における情報の表象のひとつの形態は‘活字文字’である。図式とは違い、文字は出来事についての知識ではなく、諸出来事の継起についての知識を統合する。こうして文字とは、多数の行為、

現象、及び相互に結合された諸出来事をある一定の時間の間隔の限界内で結合するような意味論的構造を持つ。人間はさまざまな状況において行為へと導く一組の文字を所有し、これらの文字はその人間にとってある原型的知識となる。

伝統的答えによれば、結合された意味の発生は主に認識活動を引き起こす。しかし、このような理解は、意味概念を個人的特徴の現象に還元するものと考えられる。専門家達が明言するように、それはいくつかの心理学的事実とは適合しないであろう。彼等は、意識へのあらゆる精神的維持－現実的実在における情緒、イメージ、観念―は、記号論的素材として記憶内の機能や特殊な限定性の保持によっては保持されえない、と主張する。従って、記号論的‘かたまり’は意識の多様な変化に富んだ組織化の‘実体’をなすと考えるのは、論理的である。

我々の観点からすれば、一般的な科学的意味を有する価値の種類の分類は、ロシア国内の心理学においては利用されている。この場合、次のような価値の種類が割り当てられる。即ち、作用的、主体的、言語的という種類の価値である。この分類の効果は、存在発生において価値の生起の連続を同時に反映するという事実に存する。作用的価値は、何よりも先ず、生物動態的構造に、主体的価値は感覚的構造に、そして言語的価値は主に思考に結合する。さらに、我々の考えでは、この分類は、特殊な会話のテーマとして有用な文化的コードの分類と調和するのである。

こうして、精神性のさまざまな層、レベル、形態の分析によって意識の構造は非一様（そこには多様な要素、層、水準がある）であるという事実にもかかわらず、意味は基本的単位として考えられる。意識の全体としての意味は、その基本的機能において、目的の言明、意識、反省、経験、意志、累積、創造性を証明する。それは、さらに発展した考察を要することは当然である。

＊＊＊

意識の意味論的パラダイムへは、記号論による接近が可能である。その場合、構造的には意識の機能的統一は、”意味“、”コード“、”言語“（テキスト）、”理解“という術語によって記述される。この選択は、世界の表象に参与するすべての認識的プロセスを、意味で満たされた意識それ自身のテキストの理解形態として考察する好機である。

人間は本質的に意味論的存在である。それは同じ程度において経済的、社会的、政治的、道徳的存在であるという状況を破棄することはできない。しかしながら、その踏襲的本質は、コミュニケーションの言語的かつ非言語的手段を使用する能力を含んでいる。記号論は人間の個人的かつ社会的生活に本来的定義―限定―を与えることを意味する。それは、人間の身体的構成と精神的表示に浸透している。このパラダイムは聖書の次のテキストに提示されている。即ち、「1.太初に言葉ありき。そして言葉は神と共にあった。言葉は神であった。2.この方は神とともに太初からおられた。3.すべてのものは神から始まり、造られたもので、この方によらずにできたものは一つもなかった。」（「ヨハネによる福音書」第１章１～３節）存在論的状況下における生命、人格、意識のキリスト教的パラダイムは、記号論を支配している。（O.Rozenshtok-Hjussi:『神は我々に話す力を与えた』（11）

しかし、このパラダイムの根源は、一時期にわたって、巨大マシンの原型を残した。Mumfordによれば、社会的巨大マシンは、四千年紀の終わりにおいて、ピラミッド紀の初期の間、帝王によって発明された（10、87）。そのような社会的発明のお蔭で、五千年前、現代の大量生産、標準化、更なるデザイン化といった最高の成果と競合することによって、壮大な技術的問題が解決された。このマシンの構成要素は空間内では直接的に分離されて

いるので、そのような製作を、Mumfordは「見えない機械」と名づけた。しかし、Mumfordは、おそらく、権威の巨大マシンは一般的な精神的－意味論的価値の現存、そして権威の論議を実現する一般的な記号的環境の現存として機能しうるとは考えてはいない。それゆえ、我々は、社会的意味論的巨大マシンの概念に労働、官僚制、軍事的機械を補足する。

人間の意識は、動物の精神性とは異なり、文化的コードにおいて働くところの特殊な種類の精神性である。文化的コードは、人間的経験の保存、貯蔵、累積、そして翻訳を提供する。それらは多様であり、かつ文化の多様な言語の諸形態において実現される。さらに、Rozinが記憶、注意、想像力を明確化したように、思考は、人間に表示される間、受容される第二の主体によって表象され、また図式と記号論の有機体の客体によっても表象される。それは、自然の生物学的かつ有機的構造ではなく、むしろある記号論としての人間によって発展させられた精神性の自己組織化である。こうして記号論的に構造化された生物学が存在する（12,160）。一方では、科学、芸術、道徳、宗教、政治、権利の記号論的図式は人間能力の形成において本質的な役割を果たす。他方、それらは「人間」と呼ばれる意味論的体系において画一的に統合される。

社会的な人間の本質は、コミュニケーションの相互作用の体系において展開される。意識的本質として人格は多面的な論理装置である。その存在の最小限の条件と意味の発生は対話であり、事実プラトンは「それ自身との魂の対話」としてイデアを定義した。対話の間、情報の相互作用、意味の増大が成し遂げられる。言語の量は基本的に制限されていないので、各対話装置は翻訳のモードにおいて働く。どんな対話も個人的百科事典の言語において多少とも有効な記号論的価値からの翻訳である。J.Lotmanが強調するように、個別的な人間的知的装置は、観念の働きにとって独占者ではない。記号の送り手を同時に統合し、かつ歴史的記憶のあらゆる深みを統合する記号論的体系は、知的作用、蓄積、過程を遂行し、情報量を増大する。イデアは我々の内にあるのみならず、我々もまたイデアの内にある（５，８）。背景的知識、国家的世界像や外観は巨大都市の巨大「混合機」の中で最も活動的に形成される（17）。

M.Mcluhanによれば、グーテンベルグの銀河への移行は、人間的本質とその精神コードを変容する社会的自然的変化である。変化の各新しい段階において、精神コードの記号論的変容はある神経・生理学的メカニズムの再組織化という形を取った。このように、話し言葉、書き言葉と印刷手段の発達は喉の再構成、精神的プロセスの新しいタイプの形成、脳の言語の変化を伴った。生理学的変化は強力な本能的傾向を中断することに繋がり、注意は本能的傾向の対象にではなく、むしろ記号や言葉へと集中した。思考方法の変化は周辺現象としてではなく、脳の反省作用の新しいタイプに示されるように、有機的レベルで生起すると考えられる。人間の意識の性質は変容される。実際、人間の意識のあるタイプは、ある人々を社会的文化的コードとして使用することによって記号論的機械として機能する精神性なのである。

印刷言語は脳の知的活動によって変化させられた言語であり、かつ印刷機械という道具はこの文化記号論に普遍的変容をもたらした。知識のコード化の変化は、人間の類型化構造を変容した。事実、人間の本性は地位機能、記号作成者達の集団による文化的現前化によって限定される。社会的原子、即ち個人の内的性質は自動的コミュニケーションの新しいプロセスの影響下において変化した。ただ単に記号論の受け手と送り手の新しい型が現れただけではなく、また精神性の新しい型も出現した。つまり、意識は発展を遂げたのである。

＊＊＊

我々は新しい記号論的変容、即ち、電子ハイパーテキストの時代に生きている。電子ハイパーテキストとハイパーメディアは論理･認識論的形態であり、「人格－機械」的思考の段階にとって特徴的である。現代においてハイパーテキストのアプローチは極度に攻撃的であり、また人間の精神性に深く浸透している。それは知識のテキスト的組織化の新しい形態、即ち、テキストの非線型的形態を生み出した。知識のそのような組織化の基本部分は、言葉、言語的ジャッキや隠喩ではない。それらの間には、連結的コミュニケーションがある。さらに、ハイパーテキスト主義は、線型的テキストを排除せず、哲学的及び科学的知識の超構成原理として発展してきた。ハイパーテキストは、元来軍事問題を解決する開発者の意志から由来しながらも、「人格－機械」的知性の接近法の条件化において、思考の基本形態となった。今日起こりつつある記号論的変化が宣言したように、我々は予想以上にもっと複雑な世界に生きている。しかし、それは、なによりも、我々自身を、我々の意識を、そして記号論コードを変えたのである。人間と「人格－機械」的思考は、人類の発展段階における意識、思考及びコミュニケーションの二つの相異なった形成体である。次の記号論的変容後、我々が住む世界像は以前よりももっともっと異なった姿で現れてくるであろう。しかし、世界像の変化と共に、人間と人間の意識の像もまた変化する。人間は内部から常に更新され、そしてそれは次のことを意味する。即ち、ただ単に生活の意味の変化だけではなく、さらにまたこれらの変化の理解の実体として「意味の脱構築」があるべきことも。

Ⅱ．空白と学際性

言語、意識、そして文化における空白（ギャップ）は《空虚》として、記号論の素材、意味、価値の非存在の或る領域を意味する。しかし、非存在とは意味、価値の欠如としてではなく、あるひとつの記号論的組織で現存することと別の組織では現存しないこととの区別をつけることである。それゆえ、空白における生命と非存在の弁証法は、対立の限界内において―《他者》、あるいは《不明確と明確》という形での―差異として示される。G.A.Antipov, O.A.Donskih, I.J.Markovina, J.U.A.Sorokinは『文化の現象としてのテキスト』において、空白と非空白について次のような対立的属性を記した。即ち、《不明確―明確、非日常的―習慣的、不慣れ―慣れている、誤り―真実》の対立である。空白の発生は固定した伝達や密閉した円環、理解と誤解の逆説、あるいは言語学者が言うように（G.V.Bykova, 等）、理解に関する付加的説明を要求する現象の集合の形成に等しい。

空白の第一例として、富のテーマは、逆説的であり、特に、金銭は現代のロシア哲学にとって、最も周辺的かつ空白に富むテーマのひとつである。《金害》のあらゆる象徴的特質は、このテーマを別な社会的課題の影に収めてきた。貧乏な共産主義的未来は、このテーマに約束しえなかった。しかし、伝達、社会生活の記号や象徴的形、社会性、社会生活の興味、欲求、刺激について論じることは、金銭の役割を考えることなしに可能ではある。他方では、我々は金銭について言及されていない多数の一般的な、そして社会哲学、社会学、倫理学の本を見出すことができる。これらの質問に関して、社会的・政治的誤用、あるいは論争ではなく、また貨幣論的探求でもなく、むしろ社会現象、文明要因として探求することが重要である。これらの秘密に満ちた性質は、おそらく知覚しえないので、ロシア国内の哲学者達は、タナトスの課題（死の請負、ギリシャ神話）を恐れるのを止めはしたが、科学的探究の対象として《金銭》に注意を払うことなく、研究を続けてきたのは事実である。

空白の哲学的分析は極めて重要であり、それは世界観の相違、カテゴリーの矛盾、価値の相違を明らかにする。空白は、個人が他者との関係において、かつ人々の思考スタイルや精神性の独自性を通して示される。空白は対話の状況においてのみ発生し、かつ存在する。そして、それらは意味論的な差異とともに見出される。さらに言語や概念的世界像の矛盾は、文化間の伝達の増大状況において生じるが、さらに複雑な性質を持つ空白の発生をも導く。

我々の観点から見て、哲学的知識の根本的空白の第二の例として、西洋哲学や科学による一定の専門用語や概念的立場によっては人間生命の実体としての魂と身体との関係を記述することは不可能であるという事実を指摘できる。西洋文明の世界観や概念的基盤は、人間と世界のイメージの形成を担ってきた。そのイメージとは、人間中心主義的議論と自然科学上の議論とは結び付かないという考えに従ったものである。この矛盾は、科学的人間学、意識、精神、そしていくつかの他の理論の中にも宿命的に見出される。Leninのように、最も唯物論的一元論者のような絶望的無神論者は、次のように肯定した。即ち、世界には運動する物体を除いては、何ものもない、と。そして、意識は非物質的かつ観念的であることを宣言し、異議を唱えたのである。これについては、V.I.Leninの著作『唯物論と経験論批判』の中で読むことができる。魂と身体、社会的なものと生物学的なものの二元論の論理は、西洋特有の人間主義的な世界観の概念化の道であるところの抽象のタイプに組み入れられている。この質問について果てしのない議論へと突入するのではなく、もう一度、我々は次のことを強調しよう。我々の観点からすれば、この空白（ギャップ）は西洋哲学及び文明の根本に起因している。この西洋哲学はキリスト教的価値観に対応しており、二元論的性質、そして生命は先天的に設定され、二つの実体（魂と身体）の境界は、ともに一方には還元しえない状態にある。

第三の例として、エネルギーのテーマは、さらに空白的で、周辺に置かれている。アジアにおける叡知―インド及び中国哲学―では、魂（精神性）とエネルギーとは一体である。西洋哲学では、基本的にこの問題は自然科学に属する。《エネルギー》概念は、西洋の人間主義においては、さらにしばしば全くかけ離れたままでいる。ロシア国内の精神と意識の人間主義的理論では「力」の概念は、定めようとしても、どこか不自然で、組織化されえない。ところでフロイトは身体と精神としてのエネルギーとの間の「断絶の危機」の除去策へと、決定的な歩みをなした、類い稀な西洋の思想家である。しかしながら、ロシアのフロイト理論研究者たちは、普遍的リビドーのテーマに固執し、我々によって特定化されたアイデアの展開には注意を払わなかったのである。

空白の第四の例として、学際的科学において現れた空白の概念及び問題を現代の科学者達は、学際性の途上において解決を試みようとしている。科学における学際性は、多様な程度に、しかも相異なって示される。さらにそれは、科学者達の決定のアプローチや理論の展開における問題、及び彼等の間の意思伝達、新しい学問分野の形成過程の出現において方向付けられる。そこでは、学際的論議は全体的段階を形成するということが可能となる。第一の段階は、隠喩によって示される。つまり、ある領域のことを別な領域の表現で描写するというような仕方で言語使用に関係する。例えば、自然科学からのシナージェティクス（共同現象、複雑な諸科学を統合する手法）という術語は、文化と意識の理論においてはソーシャル・シナージェティクス（社会共同現象）へと移行した。次の第二段階は、境界的論議に関わる。これは、複雑系の多様な断片の記述に関して研究者が多様な言語を使用する場合である。我々はこの論議の形式を折衷主義と名付ける。そして第三の段階は、現代言語の創造に関わる場面である。この言語とは、理論的総合、そして新しい実在の記述の手段として使用されるものである。このケースは新しい科学的分野の創造を導くものと

して最高位にあるものと見なされる。

学際的意識と精神により、多様な言語形態の中に結ばれた、ある確実なプロセスが「意味の動力学」として提示された。意味の不変理論は―そこでは自然科学的側面、意味の発生学、意味の動力学が研究されている―学際的戦略方法として創造された、知識の新しい科学的領域となったのである。

ロシア哲学の発展の現段階においては、折衷主義と名づけられた学際的論議が、おそらく支配的である。例えば、もし我々が近代の論文の方法を見るならば、そこには、しばしばマルキシズム、構造主義、ポスト･モダニズム等、こうした類のものが見出されよう。折衷主義は近代哲学のノーマルな存在形態であった。多元主義の脱構築へのアピールは、我々を折衷主義の段階へと還元した。しかし、伝統的には、近代文化の支配者となった折衷主義は哲学の分野では未だにもっぱら否定的にしか理解されていない。理論家達により発掘されている領域には、先立つ何十年間のギャップの《巨大な危機》、（空白）が存在している。しかしながら、歴史においては何度も折衷主義は《ケンタウロス》概念（半人半馬の異質なものの混在の意味）についての表現手段となったが、記号論は学際性の段階においては新しい合理性の形成を意味するのである。

ロシアにおける弁証法的唯物論の科学哲学の危機は、古い伝統的カテゴリーの再考と、コード変換や意味論的中心の交代を要求した。

研究課題に関しては、もはやヘーゲルとマルクスの弁証法的カテゴリーだけを使うことはできない段階に来ている。彼等のカテゴリーは、従来のアイデアを支配してきたが、余りにも単純、かつステレオ・タイプの理解を提起してきたにすぎない。しかし、逃げ去る生命を捕まえるためには、次の新しいスタイルや命名の意図をもって、たえざる新しい名称や概念的組織の探求が必要である。この時代の人間主義的哲学的知識においては、脱構築、テキストの再解釈、及び多様な言語ゲーム間の知的運動が支配的である。

Ⅲ．現代記号論の変化とポスト・モダン時代

古典的科学と哲学の原理の支持者にとって、ポスト・モダン、ポスト構造主義、コンピューター思考は、ある種のブラック・アニマル（謎の動物）として、哲学と合理性の終焉のように思われる。それゆえ、かような感情的叫びがある。即ち、「ついに哲学の終焉が到来した！ポスト・モダンは破壊を生む！」と。

ロシアの弁証法的唯物論哲学の伝統的追随者達は、依然として単純な視点に固執している。しかしながら、今や新しい記号論的環境と新しい記号体系は―それはコード化と知識の翻訳を意味している―精神的コードの変化へと時代思潮を導いている。精神的暗号は文化的暗号の変化と共に変化する。おそらくそれは同じか、平行したプロセスである。既にロシアの記号論者Jury Lotmanが語ったように、人間の意識と思考は文化的コード（暗号）における精神的機能である。コンピューターは、文化と思考の現代記号論コードの変化において主要な役割を果たしている。

現代記号論的変化である電子ハイパーテキストに関する問いは、グローバルな認識論的・精神的変化へと我々を導いた。その組織化の原理において、我々は実践的な具体的表現としてポスト･モダン、多元主義、脱中心化（中心からのぶれ）、断片性、インターネット・テキストの基本的世界観装置を見出しうる。ポスト・モダンの電子ハイパーテキストは、本来的にモダニストの印刷テキストに対抗している。あらゆる可能なデータベースの創造、図書館のコンピューター化、電子形態における情報の翻訳、これらは皆ハイパーテキストの世紀における人類史的事件の特性を表すものに他ならないといえよう。

近代のテキストパラダイムとしてのハイパーテキストは、社会の伝達手段になる。この社会は、伝統的な方法では主体によって完全には獲得されえない情報の流れに焦点を合わせたものである。ハイパーテキストにおいて知識は新しい認識論的な形態をもち、また自由なメッセージに関するネットワーク内で方向転換を可能にしている。この自由なメッセージは知識の消費主体の目的や問題に依存しつつ、結合したり破壊されたりする。知識は多数のテキストとは違う特徴をもつ。テキスト、百科事典、専門論文などの宝庫に分かれ、同時に、インターネット規模の能力をももつ。インターネットは瞬時にして情報の一ブロックから別のブロックへと移行しうる。

今日、人工頭脳もまた基本的に、組織のハイパーテキスト的形態を所有している。それは、一連の分割を含み、独自な論理的多義性、非線型性、脱中心化、連合によって特徴付けられる。ハイパーテキストにおいては、その著作者にとって始め方の良さが、線型的テキストと比較して、知性発生の道具としての機会を引き起こしていることが顕著に見られる。ハイパーテキストは、照合探索において何物にも代替不可能であり、それは、かつてブッシュ、エンゲルバート、ネルソンといった創始者達（V.Bush, D.Engelbart, T.Nelson）が仮定したように、人間の創造的潜在性の増大により、あらゆる基本的機能の中に存在するのである。

ハイパーテキスト組織の概念は、言語形態、テキストユニットの作業機会の拡大だけではなく、さらに純粋状態におけるアイデア、及び別の精神的ユニットによる作業の潜在性をも生み出すに至る。

線型的議論の具現としての印刷テキストは、古典的理解においては科学理論のイメージ発生の基盤であった。一貫性、独立性、完全性の論理的要求は、線型的議論の組織化の原理に従っている。複雑な対象の多方面からの記述、組織としての理論に関する認識論的表現は、印刷言語の記号形態に依存している。知識、認識活動、そして科学理論の組織化の形態は、現代のコンピューターの比喩によれば、ハイパーテキストであった。現代のフィクション、映画、テレビは大量消費者群において上手に維持されている。ハイパーテキストは複雑さと多次元性により、社会的アトム・個人の意識の中で、多様な世界像を生み出しうる。それでハイパーテキストは、意識の世界観構造に影響を与え、それを通して、人間の内的精神を組織化する。しかもハイパーテキストは人間だけではなく、社会をも組織化しうる。《社会的仮想現実》とは、人々の投影に満たされたものに他ならない。テキストは表現における投影、イメージ、対話等から生まれた。インターネットの根茎（自由な思考）としてのデザインは、グローバルネットワークを取り巻く社会的態度を形成する。それは、人工頭脳文化の形成、即ち脱工業化社会の文化の新しい形態である。ここにおいて、ポストモダニスト革命の終焉は、ポスト・モダンな文化と社会に対応した、本質的に新しい記号論的環境としてのインターネットにおいてのみ可能であるということで、エミリーンと意見が一致する。

ハイパーテキストの問題性とポストモダニズムの「カテゴリー」間に関わる態度とは、何か？既に幾人かの著者が記しているように、インターネットにおけるテキストの組織化方法は、Deleuz やGvattaryの主要な共著『資本主義と精神分裂病、千の平原』（Paris, Les Editions de Minuit,1980）によって展開されたところの、放浪学の基本的アイデアに対応している。引用、モザイク、根茎、脱中心化―これらはV.Emelinが論文の中で示している特徴であるが―は、インターネットやハイパーテキストの基盤に根差している。彼によれば、近代の哲学や文学には、ネットワーク技術の本質を正確に移転しうるような、しかも同時にポスト・モダン文化の世界観的文脈との相互関係を特定化しうる代替可能な概念はないのである。

インターネットの変化におけるグローバルな知圏環境は極めて複雑な情報伝達体系を構成している。それは、自己発展と自己変革の原理に従う。構造や照会を拡げる人工頭脳の動きは、機械的には決定できず、使用者により追求される目的にのみ依存する。その目的の中に

グローバルネットワーク、インターネット・リゾーム（根茎）原理の順応の承認が見出される。インターネットの組織化におけるシナージェティクスの重要な共有にも拘わらず、全体としては、対話とグローバルな普遍性のレベルでの意識の発展の領域において、それは極めて合理的かつ効果的に形成されている。

インターネットとその自己組織化の原理とは、20―21世紀の発展を享受した人類文明の自己発展の新しい形態である。これらの原理は、大規模生産の組織、及び社会的経綸において、ますます大きな役割を果たしている。大規模生産の規則の情報基礎について、物質-エネルギーを伴った変化は、市場の概念において、本質的変化を仮定する。未来社会において、一層大きな尺度では、社会的経綸は成長点において公共的プロセスへの影響力を持たないであろう。

不幸にも、高級にして宣伝的ではなく、偏見のない、これらのプロセスの分析は、ロシア哲学の特徴ではない。ロシアには人間中心主義的感覚と技術的思考の積極的兆候の盲目的愛国心があるため、技術的工学的活動そして発明、デザイン活動の高級分析は、受け入れられていないのである（むしろそれは周辺的領域に属する）。

電子ハイパーテキストとハイパーメディアは、「人格－機械」的思考の段階にとっては、論理-認識学的形態としての特徴を呈する。現代では、ハイパーテキストのアプローチは極めて攻撃的であり、また人間精神に深く侵入してもいる。それは、知識のテキスト的組織の新しい形態を生み出した。即ち、テキストの非線型的形態である。知識のかような組織の基本部分は単語にではなく、むしろ専門用語の連結と隠喩にある。それらの間には連合的伝達の一つの態度がある。さらに、ハイパーテキスト主義は、それ自身、線型的テキストを除外するのではなく、かえって哲学的・科学的知識を構築するメタ原理として発展する。年輩の哲学者たちの目前では、あらゆることが輝き、ゆらめく。それは、明確ではなく、混沌的で、モザイク調である。現実的には、それは新しい記号の登場として、以前の記号よりもさらに可動的にして複雑かつ量的でさえある。それが、インターネット・テキスト及びハイパーテキストに他ならない。既に述べたように、今や我々は現代に発生した記号的変形の世界に、つまり我々がかつて使用していたよりもさらに複雑な世界に住んでいるのである。人間と「人格－機械」的思考は、人類史の発展段階における「思考・言語・伝達」に関する二つの相異なった形態である。

＊＊＊

他方、現代の人類は、さまざまな文明が表象する諸世界観のグローバルな統合化に関して、空白領域に直面し、それに注意を喚起されている。実際、グローバル化は、未だに既存の世界諸宗教が人類を分裂させていることを取り除いていない。現代文明は、多くの面において、これらの諸宗教が世界各地に分布する境界線上にわたって、衰退しつつある。しかし、それは社会的アトム（個人）の生活の外的空間においてだけではなく、さらに人間存在の現代的表象の役割においても生起している現実である。そこには、グローバル化時代における世界宗教に関する一つの問題が横たわっている。即ち、コンピューター・バージョン（版）での新しい偉大な信仰を捧げる対象、つまり絶対者として君臨する「世界の聖霊と理性」としての新しき神、「インターネット」について、人類に投げ掛けられた課題が我々の前途に残されているのである。

（注）

1. Agafonov A .J. *The person as semantic model of the world. Prolegomen to the psychological theory of sense.* - Samara, 2000.
2. Vasiljuk F.E. *Structure of an image // Questions of psychology*. 1993.№. 5.
3. Glotoff G. A . *The person and a sign.* - Sverdlovsk, 1990.
4. Zinchenko V.P., Morgunov E .B. *The person developing: Sketches of the Russian psychology*. M., 1994.
5. Ivanov Vjach. Vs. *Odd and even: Asymmetry of brain and sign systems.*-, 1978; Lotman J.M. *Inside of the conceiving worlds.*-, 1996; Lotman J.M. Izbr. *Clauses*. In 3 vol. - Tallinn, 1992. - T .3.
6. Izmajlov C.A., Shehter E.D., Zimachev M.M. *Consciousness and its attitude to brain information processes. // the Bulletin of the Moscow State University*. Sulfurs. 14. The loony. 2001.№. 1. - With. 34-50.
7. Leontiev D.A. *Psychology of sense*. M., 2003.
8. Lotman J.M. *About two models of the communications in system of culture. // Works on sign systems. Part III*. Tartu, 1973.
9. Markov B.V. *After an orgy*. The foreword // Baudrillard J. Amerika. *To forget Foucault. A transparency of a harm*/http: // textshare.tsx.org
10. Mumford L. *The Myth of the Machine. // The Utopia and utopian thinking: the anthology of the foreign literature*: Transl. From different languages. Under red. Chalikova V. A . M., 1991. - With. 87.
11. Rosenshtok-Hussy O. *God forces us to speak*. M., 1998.
12. Rozin M. *Century Semiotics researches*. M., 2001.
13. Rudnev V. *Morphology of a reality: Researches on philosophy of the text*. M., 1996.
14. Sokolov E.N. *Neurophysiology mechanisms of consciousness. //* Mag. VND. 1990. T . 40. Vip. 6; Sokolov E.N. *Problem of a Gestalt in neurobiology. //* Mag. VND. 1996. T . 46. Vip. 2; Smirnov I.V., Beznosjuk E.V., Zhuravlyov A.N. *Psychotechnology: Computer psychosemantic analysis and psychocorrect at not realized level.* - Moscow, 1995.
15. Hofman Dzh. *Marxism and the theory of pracsis*. M., 1978; Korchunov A.M. *Reflection's kites activity, knowledge*. M., 1979.
16. Churchland P.S., Sejnovski T.J. *Perspective on Computational Neuroscience. // Science*. 1988.242. P. 741-745.
17. Hirsch E.D., Jr. Cultural literacy. *What every American needs to know*. - N.Y., 1988.

---

* ヴァシリィ・グリツエンコ（Prof. Dr. Vasiliy Gritsenko, ロシア国立クラスノダール大学哲学科主任教授, Krasnodar State University, Russia）
** タチヤーナ・ダニルチエンコ（Dr. Tatyana Danilchenko, 同大学講師）
*** 中富清和（千葉県立東金商業高校教諭）